

## 新しい文化政策プロジェクト 2023 年勉強会シリーズ

### 第3回 福井で考える、提言「社会の分子ではなく、分母としての文化政策」

日時：2023 年 8 月 22 日（火）18：30～20：30

会場：福井市地域交流プラザ 605 会議室および Zoom

司会：朝倉由希（当プロジェクトメンバー／公立小松大学国際文化交流学科准教授）

参加者：大島光春、蔭山陽太、佐野真由子、鈴木佳子、山本麻友美（プロジェクトメンバー）  
一般申込みによる参加者 24 名

佐藤岳流、オソリナ・ダリア（記録担当＝佐野研究室大学院生）

当日は司会の朝倉プロジェクトメンバーによる開会ののち、佐野プロジェクト代表より、朝倉氏の地元福井で、初めてプロジェクトの拠点京都を離れての開催が実現したことについて挨拶があった。引き続き参加者全員の自己紹介、朝倉氏による提言趣旨の簡単な説明、全体討論の順で進められた。

全体討論は、地元福井からの参加者に先行して話題提供をお願いし、それをもとに全員が自由に発言する形で行われた。（なお、以下は個々の発言の記録ではなく、討論の概要をまとめたものである。）

#### 参加者による議論

- ・浜町（福井市）では、北陸新幹線の開通にあたり街の活性化の方策を議論するなかで、単に都市部から著名なアーティストを呼んで現代アートに力を入れれば盛り上がるという話が進んでいるが、現場の人々は具体的に何をすればよいか分からない状態である。現場で起きていることと行政がつくる政策が乖離しているのはよくあることで、京都でもそのような状況が続いてきた。最近では行政が現場の人の話を直接聞く機会を作り、それが予算を無駄なく使うことにも繋がっている。
- ・そのような機会を実現するには行政と現場の間に立つ「通訳」が不可欠。提言では「文化担当官」という形で触れており、そのような制度が普及してほしいと考えている。
- ・行政において手段と目的が整理されていないように思う。福井市の総合計画を見ると、経済的価値に関する項目は詳細に書かれている一方、そもそも文化政策は人間が中心であるのに、そのようなことには言及できていない。自治体にとって、イベントで一時的にお金が動くことよりも、地域に住みたい人がたくさん現れることのほうが、税収という観点から見ても長期的に重要ではないか。
- ・福井県の文化課は交流文化部内にある。令和 2 年度に作成した長期ビジョンでは、福井県の様々な魅力を磨き上げて発信することにより、定住人口だけでなく交流人口や観客数も増やすことを大きな目標としている。また、同課の文化政策では子どもたちに文化に触れてもらうこと、祭の開催や文化財の保存に貢献することを重要視している。そして、県庁が全てを主導するのではなく、一般の人々が主導する活動を応援するという立場を採っている。

- ・福井県では文化財保護の担当部局を教育庁に置いており、文化財の保護と活用が別の部署の担当となっているため、伝統芸能などを扱うときには教育庁と文化課のどちらが担当すべきか、という問題が生じている。このような縦割りの壁を取り払い、もっと大きく文化政策を立案、実施できるようになるとよい。
- ・福井では行政ではなく民間から計画が持ち上がってくる事業の流れがあまり見られないように思う。民間と行政を繋げる場を作らなければいけないとここ数年間考えていたが、中間支援システムは現在でもあまり機能していない。
- ・行政において民間の声を拾う機能が働かないと、有識者と行政によるトップダウンの事業ばかりになってしまう。県外にいる誰かに福井県のことをやってもらうという状態になってしまい、一般の人たちが参加できない。
- ・政策の長期的な目的を考えるには、どのような課題が存在するかを理解する必要がある。例えば、福井には美大・芸大がなく、中高生はどこに進学すればよいか分からないなど、色々と選択肢が限られていることが課題として挙げられるだろう。
- ・今回は仙台からの参加者もいるが、仙台にも美大や芸大はなかったはず。そちらではどのような状況なのか。
- ・仙台の場合には隣県の山形に芸大があり、繋がりがあがる。また、外から入ってくる文化を受け入れやすい環境がある。
- ・仙台における外からの文化を受け入れやすい環境により問題となったのは、宮城県美術館の廃止反対運動である。近年美術館の廃止が決まった際、反対を強く訴えたのは地元の風景として館の存在に慣れ親しんできた住民が中心で、多くの地元アーティストたちは声をあげなかった。なぜなら、従来の同館は外から有名なアーティストを呼ぶばかりで、地元アーティストたちは県の美術館に育てられた実感を持っていなかったからである。
- ・「観光で稼ぐ」という趣旨の話をよく耳にするが、言い出した行政の側は具体的な計画を立てず単に助成金を出すだけで、地域の人たちが何かやらなければと慌てふためく状態になっている。
- ・「観光活性化のために文化を使う」という発想を逆転し、「文化を活性化するために観光はどう役に立てるか」という話にしていかななくてはいけない。そうしなければ文化はいつまでも使われるままである。文化を壊してしまう観光や町興しが近年の日本では非常に多いが、歴史や文化を壊す観光推進ならば、文化の担い手である市民が止めるべきである。
- ・観光で稼いだとしても、稼いだ後、一体何に投資して、何を再生産するのだろうか。そのような目的が置かれていなければ、地域の人々は「自分たちの文化が消費されていく」という感覚に陥ってしまう。
- ・「何を再生産したいのか」というのは、とても重要な問題である。そもそも本プロジェクトの提言の本旨は、具体的な施策の前に、どういう社会にしたいのかという理念から考え直すということだが、それはまさに「何を再生産したいのか」という問いに重なる。

- ・提言の中で特に興味を持ったのは、文化政策の射程範囲をもっと広げようという姿勢である。自分の仕事は「文化政策」とは遠く離れているように思うが、そもそも文化というのは生活の中にあると常に思っている。
  - ・文化について議論していると、いわゆる「狭い文化」に囚われがちになってしまう。むしろ「文化」には狭義の具体的な層もあり、それについて話してはいけないというわけではない。しかしこの提言で謳ったのは、人の生き方そのものとしての文化、次の世代にどのように生きてほしいかを考えるという意味での文化政策である。
  - ・その点をわかりやすくするためには、提言の前文にあるように「文化的活動」と「文化」を分けて考えるとよい。日常感覚の中では、「美術館に行く」など何らかの「文化的活動」を文化として捉えがちだが、本来、文化とは、そのような活動の有無とかかわらず、そこに暮らしぶりそのものを言うはずである。
  - ・文化の捉え方について、提言ではユネスコの定義を紹介し、生活様式、価値観のようなものが文化であるという立場に立っている。むしろ、具体的な芸術活動を盛り上げようといった話はアートに関わる人の切実な課題だが、それだけを考えると、議論の範囲が狭くなっていってしまう。そこから少し離れて、文化は広く社会全体のありようを指すものと捉え直し、そのような議論を活発にしたいと当プロジェクトでは考えている。
  - ・「何を再生産するか」という議論においても、この提言では、再投資する先は必ずしも芸術や文化財であるべきという限定的な答えにはならない。
  - ・文化と芸術はよく「文化芸術」という言葉で一口に語られるが、それを分離することが必要だ。文化はもっと広いもので、その中に芸術や産業が含まれている。
  - ・芸術が貢献できる範囲は、実は一般に考えられている以上に限られている。大衆に受け入れられる芸術は概ね保守的で、現代アートを観光や地域興しに利用するのはたやすすくない。ここでも文化と芸術を切り離して見ていくと、もっと可能性が見えてくるかもしれない。
- 
- ・伝統産業は次世代に繋げることを主な目的に現代アートと組むことが多いが、イベント時以外の普段の伝統産業に注目する人は少ないままである。伝統文化を紹介しようとして現代アートのようなキラキラしたものを付け加えることが多いが、最終的に得しているのは現代的なものの方で、そういうやり方は文化とか伝統を安く売ってしまう。コラボレーションの先を見据えて、慎重に考えなければいけない。
  - ・伝統工芸と現代アートを結び付けようとする動きに関連して、震災の伝承施設においても現代アート作品を取り入れている事例があったことが思い出された。宮城県の伝承館は数少ない事例の一つであったが、なぜ現代アートを伝承館に取り入れようと思ったのか。
  - ・宮城の伝承館で最も大切にしているのはオーラルヒストリーである。苦しんだ記憶が失われていくことにはプラスの面もあるが、記憶を風化させないことはやはり重要。しかしそれは非常に難しく、被災の経験がなかった人が想いを共有するのも難しい。伝承館では、そうした記憶を思い起こしてもらうためには現代アートしかないと考えた。現代アートの場合、あのとき起こったことと雰囲気を感じることができる。「この怖い感じは一体何だろう

う」という違和感をもってもらい、「あの時もそうだったのだろう」と少しでも考えてもらうことが目的である。海外の人々も多く訪れるが、彼ら彼女らは日本人大学生より現代アートの展示を咀嚼する能力が高いように感じる。そのように、現代アートには言語を超えた強い力がある。

- ・福井の地場産業である越前和紙では、和紙職人の側が自身の製品を完成した作品と見なし、手を加えられることへの拒絶感があるため、現代アートの展示をしても和紙の漉き手が観に来ることはほとんどない。また、逆にアーティスト側が職人の所に行くこともなく、交流がないことが問題である。
- ・越前和紙は伝統産業としての足腰は強い。世代交代に関して大きな問題はなく、技術が途絶える状態にはなっていない。世代交代では親の仕事を子が継承するが多い。
- ・そのこと自体が文化の状況として重要ではないか。現代アートとの交流がないと文化的でないということにはならないのではないか。
- ・担い手が絶えない状況を維持できている背景には祭の存在がある。越前市には全国で唯一、紙の神様を祀った祭が存在し、祭に参加することを通じて産業の担い手としての意識が育まれている。
- ・越前和紙の場合、文化的な存在である祭が衰退していくと、経済的な存在である和紙産業の衰退につながりうる。そこが繋がっていると考える人とそうでない人では、「何を再生産するか」ということの価値観が大きく異なると思う。自分たちがどのような歴史の流れの中に生きているのかを理解すると、どこに投資すべきか、文化をどう捉えていくかが自ずと見えてくる。
- ・地元の方は意識していないかもしれないが、日本の和紙総生産高の四分の一を福井県が占めている。「福井の和紙」ではなく「日本の和紙」と考え、その中心が福井であるという捉え方をしたらよいのではないか。
- ・人々の暮らし方、社会のありようそのものとしての広義の文化を前提とすると、ではどのような状態をめざすのか、わからなくなってくるところもある。
- ・どんな暮らし方も「文化」ではあるが、一人一人が日々の生活が充実していると感じられる状態、あるいは一人一人が自分の発言したいことを発言したければできる状態が、文化的ということなのではないかと思う。言いたければ言いたいことを言えるという意味において人々の関係が対等であることも含まれるのではないか。「生き方そのもの」して文化を捉えるところからもう一步踏み込んで、生き方がいろいろあってよい、みんなが自分の生き方を追求できるということだろうか。
- ・自分の中に大きなミッションがあると発言し続ける力に繋がるが、そういうものがないと声をあげることに繋がらない。
- ・福井という地域がどういう地域なのか、県民自身が自覚しないと、社会をどうしたいかという声はあがらない。

- ・今後どのような社会にしたいかを考えるために、県外に目を向けることは非常に重要だと思う。例えば、福井県で家族構成についてのアンケートをとったとき、6人家族や10人家族などの大家族が多く驚いた。外からの視点で見れば、そのようなこと自体がおそらく福井の文化であると思うが、県内の人はそのような家族構成を普通だと思っている。自分のことを知り、普段自分が何を大事にしているのかを自覚できれば、意見は自ずと出てくるのではないだろうか。
- ・福井県の人口は70数万人くらいで、東京でいえば23区の一つくらいの大きさ、神奈川県でいえば三つある政令指定都市に次ぐ規模である。そのような、あまり大きすぎない規模のコミュニティだからこそできることはたくさんあるはずか。人々の繋がりや良さがあって、文化を育みやすい環境でもあると思う。

## 記録者所感

今回の議論を通じて気になったのは、今福井県内で暮らしている人々のうち、果たしてどれほどの人々——特に子どもたち——が、20年後あるいはもっと遠い将来も福井で暮らしたいと考えているかということである。

議論においては、現代アートや伝統産業、経済活動の問題に関する内容がたびたび出された。福井の社会の営みを続けていくうえで、そういったことは大きな魅力になり得るし、決して軽視できない重要な問題である。しかし、議論の中でも言及されたような、大家族の賑やかさ、規模が多すぎないコミュニティ、あるいは話には出なかったが、空気や水が美味しい、言葉が美しいなど、日常生活の数えきれない何気ない場面にこそ、福井に「行く」のではなく、「住む」ための本質的理由があるのではないだろうか。

一方で私は、福井の数年後の姿が必ずしも「福井でしか見られない社会」である必要はないとも思う。なぜなら、人々をある地に長期的に惹きつけるのは、個性——例えば物珍しさや華やかさ——ではなく、「ここなら私も暮らしていける」というような日々の安心感だと考えているからである。本プロジェクトで議論している「分母としての文化政策」、あるいは提言における七本の柱とは、できるだけ多くの人にとって安心感のある社会をいかに作り続けるかという問題ではないだろうか。

佐藤岳流（京都大学大学院教育学研究科修士2回生）

これまで知らなかった福井県の和紙産業のお話を非常に興味深く聞かせていただいた。元々ロシアの大都会から離れた小さな町に住んでいた者として、伝統工芸の維持、アーティストの流出など、共感できる点がたくさんあり、地方特有の問題には国を超えて通じるところが多いと思った。

ところで、討論のなかで、伝統文化を紹介しようとして現代アートのようなキラキラしたものを付け加えることが多いという話があった。最終的に得ているのはキラキラな現代的なものの方で、結局伝統文化のほうには目がいらず、そういうやり方は文化や伝統を安く売ってし

まうという話が出ていたが、私には賛成できないところがある。私はロシアでの学生時代から4年間、日本のお茶を習っているが、元々は日本のポップカルチャーのフェスティバルで茶道のデモンストレーションを見て、「和菓子は美味しそうだし、やってみよっか」という軽い気持ちで始めたのであった。それはいまや伝統文化全体への関心に繋がり、ポップカルチャーや現代アートより、そちらの方に関心がある。周りでも同様の例をたくさん見てきたし、自分でもロシア国内で茶道のデモンストレーションに参加させていただいて、伝統文化を「面白く」「楽しく」紹介することの重要性を実感した。現代アートと合わせることは伝統文化の価値を損なう行動のように見えるかもしれないが、決してそうではなく、より多くの人にそれに触れてもらう機会を作る行動なのではないかと思っている。

また、論理的に言っても、もともと現代アートが好きだった人が現代アートを通じて伝統文化に触れる場合、現代アートは新しい観客（消費者）を得るわけではないので、得るのは一時的であっても新しい観客を得る伝統文化の方である。伝統文化の担い手の考えを尊重するのは何より大事なことだが、こうしたコラボレーションは伝統文化にとって悪いことではないと感じている。

オソリナ・ダリア（京都大学大学院教育学研究科修士1回生）